

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1988  
2



東山魁夷装丁の美装本!!

# 倉橋惣三選集

〈全4巻〉

B6判 上製本ケースつき



倉橋惣三

わが国幼児教育の基礎的な理論を集大成し、熱心な指導と啓蒙によって、幼児教育界に多大な貢献をなした倉橋惣三先生の没後10年を記念して刊行された選集。



第1巻 幼稚園真諦・子供讃歌・フレーベル/416頁/定価2,000円

第2巻 幼稚園雑草/448頁/定価2,300円

第3巻 育ての心・就学前の教育他/472頁/定価2,400円

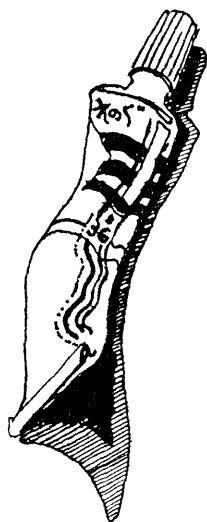
第4巻 保育案他/456頁/定価2,000円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十七卷

第二号

幼児の教育目次

——第八十七卷 二月号——

© 1988  
日本幼稚園協会

冬の声……………太田 愛人…(4)

SF的読み解き 子どもという風景

第三十四回 変化の潮流……………堀内 守…(11)

ある日——行為の意味の理解は

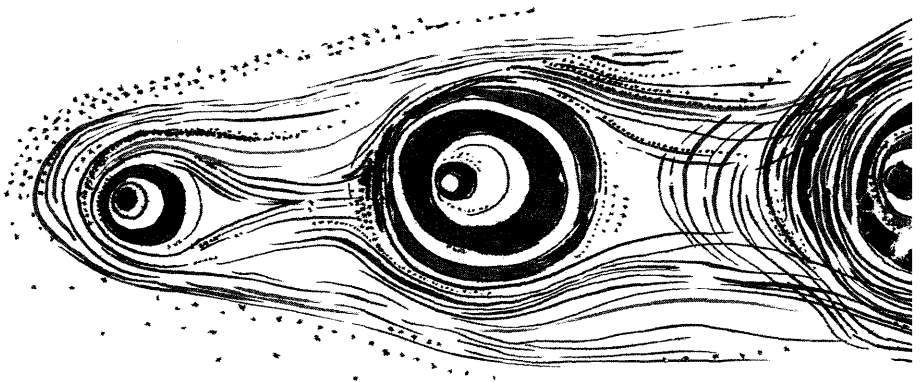
いかにして可能かを考える……………津守 真…(20)

幼児期の意味するもの……………本田 和子…(26)



落とし穴……………	はるにれの会 山本 奈緒……………	(34)
冬から春へ——無患子 <sup>むくろじ</sup> ……………	蕪木 寿江……………	(42)
子どもの会話(その六)……………	無藤 隆……………	(48)
中国のむかし話		
「宝の盆」……………	近藤伊津子・編……………	(55)
住まい「表と裏」……………	小澤 誉子……………	(60)

カット・福田 理恵  
 編集部・小澤 誉子  
 土屋真美子





# 冬の声

冬こそ 男だ

しんはしっかりと 頑固で

その体は 鉄のようだ

甘さもにがさも いとわない

冬のように 健康な男がいるか？

冬は けっして 病んだりしない

熊のように 寒さを ものともしない

冷たい部屋で 眠るのだ

太田愛人

……

(伊藤紀久代訳)

シュューベルトの『死と乙女』の詩を書いたマティアス・クラウディウスの詩『ストロブのうしろでうたう歌』の冒頭の八行である。南国の冬にはない厳しい北の冬が、きわめて人間的にうたわれている。北国や雪国で育った人なら誰しも共感を抱くような詩である。

日本列島の夏は、どこも暑くて耐えがたいが、冬になると太平洋岸と日本海沿岸とでは大きく違い、また平野部と山地とでも異ってくる。寒さと雪がついてくるからである。昨年の秋、日本海沿岸にある新潟市の私立高校の生徒と共に豪雪地で有名な松之山に行って稲刈りを手伝ってきた。五メートルも積る雪の中で農民はどうして生活しているのか、高校生たちは興味を抱き、さまざまな質問を試みているのが体験学習のための文集にのっていた。

「雪の下で何をしているのですか」

「考えているのさ」生徒たちにとって五メートルの雪の下で「考えている」農民の存在が大変刺激的であったようだ。

外部の者にとって「考え」の内容が気にかゝるらしいが、その内容までは立ちいって質問していない。あとは現地を訪ねた者が自分なりに推測すればいいことである。

五メートルには及ばないが「雪五尺」とうたった一茶の里で三年半暮らしたことのある私にとっても、この五メートルの雪の下で考えている生き方からさまざまな示唆を受け

た。

雪の多い冬を越すためには、考えなければ生きていけないのである。暖地の羽根つきや門松風景の冬からは到底想像もできない冬があり、そこではクラウディウスのうたうような男や熊の意志と体力が必要になってくる。冬に考えるところから生活の知恵が産み出され、創造のいとなみがなされてくる。そして人知の及ばないところは自然の作用を学んで生活に豊かさをもたらさねばならない。長い冬をぬきにしては人間の文化は生れてこない。

五メートルの雪の下で大地は休むしかない。しかし、そこで作られる米は、戦後でも有数のうまい米であり、私も稲刈りのあとごちそうになってきた。冬といっても名ばかりの暖地だとれる二毛作の米では、到底うまい米とはいえないのである。生産と休養のリズムは人間だけではなく大地にとっても必要であることを農作業から学んできた。

こうした冬のいとなみを自然から人間に適用して教育の分野に展開した人がいる。日本の社会教育、主として監獄改良、教誨、非行少年教育の先駆者 留岡幸助である。

留岡は明治時代から日本の底辺ともいえるべき北海道の獄舎に進んで教誨師として入り、アメリカで学び、欧州を巡歴した結果、日本の教育に欠けたものとして人格的要素と自然的要素をあげている。この欠点を補うため北海道社名淵に家庭学校を移して教育にうちこんだ。

「冬季に半年休憩した土地は、一陽来復の春に逢ふて播種されると其出来栄えは驚くべき



ものがある。北海道の作物がよく成熟<sup>て</sup>る所以のものは雪のたまものである。今一つは比較的長い冬季（六ヶ月）は地下一尺から二尺まで氷結<sup>こ</sup>るのである。其故冬季は大夏高樓と云はれる程の建物でも、余程基礎を深く掘り下げて堅固にしないと其の家屋が持上げられる恐がある。さやうに北海道の土地は地下の凍るのが強いから、この氷結は自然作用で一二尺は深耕されたも同然である。之が又北海道に農作物が能く出来る所以である。」（原始林の生活・大正十三年）と書いている。

ここに紛うかたなきカルチュアー||文化||農耕の原型が提示されている。留岡はこの冬のもたらす自然的諸要素（ナチュラル・エレメント）こそ人間を育て、錬えることに気付いて、東京策鴨の寮を廃して北海道の原始林の中で新しい教育を展開することになる。

留岡は自然的要素を更に二つに分けて、「人間生活の周囲を包んでいる処の天然自然を全然仇敵と見てしまう思想」と「天然自然を誠に恵み深い有難い慈父だとする感謝的態度」を指摘している。彼は前者にはジャック・ロンドンや二宮尊徳をあげ、後者に貝原益軒、ラスキン、ベスタロッチ、フレibel、イエスらの自然観をあげている。

冬を考えただけでも仇敵視して生きることとはつらいことであるが、冬に親しむ要素もつてつきあうと多くの賜物が与えられる。人間が耕作し、施肥しなくても、冬の土は寒さのゆえに働き、人間が想像する以上の肥沃な土にして作物を生育させることを体験した留岡は、この辺境の大地こそ人間も作ってくれることに開眼させられたのである。無人の冬のいとなみに着眼した点に改めて教えられることが多い。

自然や季節を失っていく時代に、人間の側にも崩壊現象がおこっていく。留岡が見ぬいたパーソナルなもの、ナチュラルな要因が、知らないうちに排除なされがちな教育の現場で、もう一度、沈黙の冬に身を置いて、冬の声を聴くことが必要になってくる。

私が温暖な地方に移ってみて、冬への対し方がこうも違うのか、と痛感させられたのは、二月に入って太平洋沿岸の地帯でも雪が降る時であった。一夜に三十センチも積ると幼稚園や学校が休みになるのが普通である。私はどうして休みになるのかわからなかった。雪国では一メートル積っても休みになることはない。交通機関が積雪に弱いということばかりではなく、人間の生理機能が雪に対してもろくなっていることに気づいた。園庭や道では雪の処置に困り、一刻も早く雪を消すことに熱中する。これなどは留岡のいう自然を仇敵視する考えにほかならない。雪を天から賜った遊具、恩物とする発想法が生れてこない習慣が、いつの間にか確立してしまっているのである。北国の子供の豊かな雪との遊びは、南国では無視されている。寒い、冷たい、が人間の行動をさえぎるばかりか、考えることすら生み出さないようにしくまれている。

自然を感謝、慈しみ、恩恵と受けとめるところから自然を通して感性が育っていく。積雪による白一色を背景とする世界から逆に色彩への目覚めがおこり、色彩を活かして長い冬に耐える人間らしい生き方に気付かされるのも北国の特有な利点といえるであろう。このような感覚は幼時の頃から自然につちかわれているのである。

雪国の子供たちは雪による日影を黒で描かない。いつも青い影を見ているからである。

緑一色の夏の木立を雑に描く子も、葉を落としたあとの冬の梢を精緻に描くことに努める。冬のほうが樹木にとって本来の姿にもどることをいつしか身につけているからである。

四季の自然の色彩がはっきりしている地方に住む者は、雪のもたらす白が自然の基調をなす色彩であることを知っている。白い冬が毎年、必ず訪れることを知っている者は、冬の白い色を知らずに育った者よりも色彩の豊かさを自然に身につけているはずである。

冬の沈黙は聴覚を錬えてくれる。音を吸収して沈黙の深さを教えてくれるのも五尺の雪、五メートルの積雪である。そこで耳を澄ます者のみが人と自然のふれあう音を聴きわけることができる。冬の朝、目覚めてすぐ、雪が降ったか降らないかを室内のふとんの中で聴きわかるくらいにならないと冬の生活者になれない。なれてくると、戸外の人の話し声や足音が積雪のあるなしで違ってきこえてくるようになる。冬はこうした微妙な聴覚を少しずつ錬えてくれるのである。

詩人の聴覚は、雪の作り出す微妙な音をとらえて作品の中に巧みに用いている。

「堅雪かんこ、しみ雪しんこ」

「小さな雪沓をはいてキックキック、野原に出ました。」

「キシリキシリ雪をふんで白い狐の子が出て来ました」

「キックキックトントンキックトントンと足ぶみをはじめて」

「北風びいびい、かんこかんこ

西風どうどう どっこどっこ」

「雪はチカチカ青く光り」

(宮沢賢治『雪渡り』)

電や北風の中に身をさらした人でなければ、とても書けない冬の声といえよう。沈黙の雪の世界に住んでこのような擬音を詩人は聴いて子供たちに自然の音を情景を伝えようと試みている。厳しい冬はこうした微妙な聴覚を色彩感と共に少しずつ錬えてくれるのである。

冬は物事や感覚の始まりの季節でもある。南国のヴィヴァルディの『四季』は春から始まるが、冬の長い北国ロシアのガラスノフの『四季』は、冬から楽章が始まる。

考えてみれば冬にはマティアス・クラウディウスの描く「冬」のたくましさがある反面、人間の感覚を微妙な色彩や音響に上って目ざめさせる働きをも含んでいるともいえる。ただ、これは言葉や絵本で直接教えることはできない。住んでみて、厳しい冬と共存して初めて気付かされることである。

今でもおそくはない。スキーで雪の中に出かける時、少しでも冬の本質に触れ、沈黙の中に伝えようとしている冬の声を聴きわけてみよう。冬は厳しいが、やさしい教師でもある。

(上星川教会牧師)

## 第三十四回 変化の潮流

### 堀内 守

表情が溢れる

こちらの岸辺からあちらの岸辺へと人を渡す。船頭さんのように、新しい時代へと人を渡していく。ウーランドの詩の一節である。

双方の岸辺は、長い間大して変わらなかった。船頭さんは、ゆっくりと船を漕いだ。

しかし、昨今は違う。昨日の岸辺から見ている人は、いま何が起きているのか、わからないだろう。静かだった川の波はしぶきをあげて激しく流れはじめ、向う岸

の姿はよく見えない。川は幅が広くなり、川の色も変わってきた。川は、河と呼ばなければならぬほど姿を変えてきた。人も物も、情報化という大河の中に投げ込まれた。

この河に溢れるのはさまざまな流れの融合である。昔と今との、おとなと子どもとの、洋の東西を問わず、男女を問わず、境界が定かではなくなってきた。

渡っていく人びともさまざまな流れ方をしている。おそるおそる渡っていく人もいる。はしやぎまわっている



人もいる。あまり力まないで、素直に渡っている人もいる。どのように渡るべきかとはだれも言わない。いっしょに渡りませんか、という呼びかけの声だけがあちこちからきこえてくる。

### 「よい」の前身

変われば変わったものである。かつてモノが重視された時代があった。機能性と合理性を重んじ、流線形が新鮮なデザインだった時代がある。

その時代においては「よい」ということは機能性と合理性を意味した。ところが、情報化時代に入ると、「よい」の前身が変わりはじめ、実用的な定義からはみ出しはじめたのである。

本当は、いつの時代だって、「よい」の意味ははっきりしていないからである。個々の場面によって「よい」の文脈はさまざまに変化した。しかし、全体としては、「よい」の意味あいには、ある共通の方向を目ざしていた。

「よい子」の前身について、少しでも問いを深めてみればよい。「よい子になるのだよ」というような場合の「よい」、「よい子だね」という場合の「よい」だけをくらべても、微妙に違っている。けれども、全体としては「よい」に関してはある共通の理解があった。

それは、論理的に「これだ」と説明できる部分もあれば、説明できない部分もあった。説明することはできなくとも、感じとられる——そのような深い層にささえられていた。

「よい」は、理性的な面もある。感性的な面もある。どちらにひきつけ過ぎてもバランスを欠く。

もし、説明ができるものならば、「よい」の前身は計量的な局面に限定されてしまうだろう。(理性ということばは、計量ということばと同根であることは、よく知られているところである)

どこの言語でも感性に関しては、さまざまなふくらみをもっている。いろいろな方面に次々と広がっていくうなふくらみである。「感」は、センスであり、「セン

「意味」のほか「感性」「知覚」「感じ」「気持」のように広まっていく。

これらは辞典や文献を通してたどれるところであるが、情報化の進展につれて、さらに「よい」はふくらみを増幅させていった。文章表現以外のさまざまなメディアを使つての表現にまで「よい」の使用を広げて調べてみると、「よい」は、がっちりした概念ではなくなくて、「好き」に近いといっているように見えてくる。「グッド」から「ナイス」への変遷といったらその感じをつかむことができるのではないか。

【ナイス】の向かうところは、どんなところなのだろう。

それは子どもの現在を見ることで、より明瞭に見えてくるのではなからうか。

### ナイスの岐路

ナイスには三つの文脈がある。

第一は好みのむずかしい、という意味である。「食物

などにやかましい」というような日常的な意味から「洗練された」というような意味まで上下の目盛りで動く。

今風にいえば、グルメだの、目利きだの、差異がわかるだの——がこの文脈に入る。

第二が微妙な、という意味である。正確さを要すること、解決の困難な、というような意味である。精巧な、精妙な、というような意味もこのグループに入る。

第三が、気持のよい、とか結構なというグループである。ふつうはこの意味が「ナイス」の意味であるように使われている。

具体的な例をあげて説明してみる。

とかく子どもを中心にしたブームや遊びは、かならずその弊害が話題になる。ファミリコンピュター（いわゆるファミコン）などは、視力が低下するという話題から、外遊びをしなくなるとか、夜ふかしをして遊んでいて勉強をしなくなるというような「弊害」がとりざたされる。

しかし、当の子どもにとっては、そのようなおとなの



心配をよそにファミコンに夢中になるということは大いにありうるのである。

ではなぜ？

ファミコンは、パーソナル・コンピュータ（パソコン）よりも複雑ではない。ゲームを楽しむだけなら、これ以上シンプルにはできないと思われるほど操作も簡単である。

それに夢中になっているのは主として小・中学生である。彼らはファミコンをこくふつうの遊び道具と見なししている。おとながコンピューターに対していただくような抵抗感や恐怖心はまったくなくないといってよい。これが「ナイス」感覚の具体例である。

昔の小学生にはラジオを組み立てるような器用な者もいた。「組み立て」である。ところが、ファミコンに夢中になる子どもたちは、「組み立て」の感覚はない。しかし、目の前に並んだキーボードのボタンを軽快に押すことにかけては一人前である。半分遊びで、半分創造である。あるいは操作なれといってもよい。

面白いのは、キーボードを指で押すときの音をどう表現するか、である。彼らにいわせると、その音は「ボンッポン」ときこえるのだそう。この感覚は、デジタル感覚と命名することができるのではないか。

また彼らは、コンピューターのソフトや、コンピューターに関する情報を交換し合う。これが新しいコミュニケーションの主題になっている。

昔の子どもが本を貸し合ったように、今日の子どもたちは、ソフトを交換し、その貸し借りの世話をする子どもまで出てきている。つまり、どのだれがどういうソフトをもっているかを表にし、どのだれがどのだれに貸したら互いに得をするかをマネージするのである。こうなると、まるで手配師であろう。別の言い方を許してもらうなら、これは子どもたちがそういう役割の子どもを必要としはじめたということであろう。

本のまわし読みと異なるのは、彼らがソフトの内容について、雑誌やカタログ、はては友だちからの口コミによってかなりくわしい情報をもっていて、個々のソフト

については相当きびしい評価ができるまでになっていることからも知られる。

同じ値段のソフトを買うに当たっても、内容が複雑で操作のしがいのあるものを選んでいく。

#### メカ体験は遠くなり

この子どもたちの体験の中身は、かつてのメカに夢中になった子どもたちとはだいぶ異なっている。本屋の店先で、マイコン関係の雑誌を立ち読みした世代である。

ファミコンをゲームとして使っている彼らは、操作する過程を楽しんでいる。

メカなるものは、何ほどかメカニズムが目に見えたのである。どういう仕組みになっているかに関心が集まっていた。組み立てたあと動かしてみる。それがメカに夢中になった子どもたちの原体験である。ところが、ファミリーコンピュータの世代になると、本体の仕組みよりも、プログラムの方に関心が移ってしまい、プログラムの複雑さの優劣を競うゲームになった。

#### キーボード

電話も遊びに使われている。電話とキーボードを遊ぶの用具に仕立てあげたのは子どもたちである。

思わず「用具」ということばを使ってしまったが、このことばもしいに「用」と「具」に遊離しはじめたようである。その昔、柳宗悦やなぎむねよしは、日本民芸運動を唱えたが、彼はデザインを「用」と「美」の二語で表現した。

「用」とは実際に使われることである。「美」はそれが美しく表現されていることをさしている。

子どものライフスタイルの変化を見ると、「用」も「具」も、ともに時代の変化をうけて新しいカタチを取りはじめたように見える。

キーボードを操作して楽しんでいる子どもたちは、情報ドラマよろしく手玉にとっているのである。面白いもの、変わったもの、新しいもの。それが混然となっていく、そこから何か新しいカタチが生まれてくる。それが生まれてくるのを見るのは、まるで新しい世界が誕生

するのに立ち合っているようなものだ。

### 機械のイメージ

ファミリコンコンピュータだって「機械」の一種である、とおとなはまず考える。そのおとなでも、自分で端末とたわむれているときには、キーボードを叩きながら、ひとりでに機械と会話をしている。まるで、相手が生き物でもあるように。そして、ことばを解する生き物と話しているように。

手足の延長の機械から神経系の延長の機械に変わった。すると、機械の本体も、轟然と音をたてるようなこととはなくなった。軽快なのである。ハイスピードなのである。脈うち、衝突し、渦を巻いているような昂揚感が伝わってくる。

のみならず、ファミコンは、いつのまにか老練で、若々しいコンサルタントに変貌した。

### モノ中心の秩序の動揺

このようなカタチをたぐり寄せながら考えていくと、奇妙な事態が生じていることがわかってくる。

かつての農耕社会ではおとなと子どもの境い目ははっきりとしていた。年齢によって分けられていたのである。その裏には肉体の強さによる尺度が見てとれるし、人生の経験年数がおとなを子どもから分けている基準であったことも見えてくる。

工業社会においても、基本的にはこの仕組みは同じだった。つまり、いちばん重視されたのは体力であった。ところが、機械のイメージが変わった。

農耕社会や工業社会においては最重要だった体力は、ゆっくりと身につけられていった。

ところが、今日ではその「ゆっくり」が保証されなくなってきた。「ゆっくり」どころか、幼ない子どもの頭脳を活発にさせているのは「早く早く」のかけ声であったり、「急げ急げ」のかけ声だったりする。

## アマとプロ

かつて「プロ」といえば、時間の流れのなかを耐え抜いて、一並以上の力量を身につけた人のことをさしていた。「がまん」のプロ根性は、ここにおいて大きく変わった。休日が増加し、余暇に興ずる人びとの層が増していくにつれ、「プロ」の概念も変質した。それに応じて「アマ」の概念も変わった。双方の境界線は薄くなっていき、アマともプロともつかぬ人びとの層が出現した。「プロ」であっても一生その道で生活していきるとはいえない。一人の人間のなかにも「プロ性」と「アマ性」が共存できるような時代だ。

とすると、「確実にこういえる」というような断定はできなくなる。代わって、「たぶん」とか「恐らく」というようなことばが生き返ってくるだろう。

本当の答はひとつしかない、のではない。角度を変えればいくつも出てくる。その結果、情報が与えてくれる恩恵は、その裏側に不安をかかえ込んでいる、ということができる。

## 対応

情報の量が増える。同時に情報は多様になる。だから、すべてと対等につき合っていたら、きわめて表面的、浅薄なものにならざるをえない。のみならず疲ればかり残るはずである。

それなのに情報の選択がなされるのはもっと根本的なところから生じている。つまり、人間は情報の氾濫のなかにいながら、その大半をやり過ぎし、必要なものを選びとり、それを編集し、見出しをつけたり、解説をつけたりしているのである。

かりにその見出しに相当する項目を並べたとしよう。すると、人間が長い問いかに「衣・食・住」のために苦闘してきたかということもわかってくるし、同時に、今日ではそれらが一応満たされるに及び、「遊」「休」「センス」等の視点から万事が解説されるようになったことが見えてくる。

おとなも、子どもも、その意味では似通ってきたのである。

情報化の進行は、さらに双方の役割を変えていくであろう。子どもを育てることはたしかに手のかかることだし、むずかしく、責任も大きい。が、育てていくことになかに、育てるのを見守る楽しみも含まれているし、共に学ぼうという訴えも内外に試みてみる価値があるであろう。

#### 対応のステップ

まず第一に情報の収集を試みよう。それも無制限に広げたのでは意味がない。できるだけ大らかな態度で、見なれたものを見直したり、距離を置いてみたり、当事者に語ってもらったりすることだ。第二は、そうして収集された情報の整理である。整理とは、情報を類型として分類してみることである。第三は、その分類にもとづいて、分析してみる段階である。第四は、情報をさまざまに加工してみることである。そして、第五が情報の発信機能で、できあがったものを、どういうメディアで発信するかが問題にされる必要がある。そして最後は、そう

して発せられたものが人びとにどう受けとめられたかをたしかめることである。

こういうと、何やら大変むずかしいように響くだろうが、今日必要なのは、それを重々しくやるのではなくて、身のこなしも軽やかに行うことであろう。

#### 耳を傾けて

こういう時代においては、できあいの知識で新しい事態をやたらにきめつけることは正しくはないであろう。「とっくにわかっていた」というような言い分よりも「初めて見るような態度で新鮮な気分で見直してみる」ということが大切であろう。耳を傾けて聴くこと――

今日の子どもたちの声がきこえてくる。

かなりスピードが速くなっている。そしてカタログ化している。くわしく知っている。小さな情報をもとにストーリーを短時間でつくるのも彼らの特徴をなしている。断片的な情報をもとに、起承転結のあるストーリーをつくることは朝飯前のことになった。

こんな小さなできごとだけからも、かなりの予想が生まれてくる。

情報の断片をつなぎ合わせることは、モザイクのなかから本当のことは見つけ出すことに通じている。解説、読みときである。それはできあいの問題を解くのは違っている。答えがあるとはかぎらないし、あったとしても一つではおさまらない。おさまらないということは、その合い間を想像力で埋めることを必要としよう。

子ども性はおとなのなかにもある。生きている。しかも、ますます多様化しておとなのなかに生かすはじめた。これは比喩というよりも、すなおに事実だと受けとめた方が当を得ているだろう。

それを見守る。見守るまなざしは、ジロジロでも、ニヤニヤでも、イライラでもないだろう。これらの个性的な表情を超えた「ほほ笑み」であるだろう。と同時に、そのまなざしの持ち主なら、子どもたちに声をかけるだけのゆとりをもっているはずである。

見ているだけでは足りない。目をかけてやり、声をか

けてやり、さらに手をさしのべてやる。これらが子どもを見ていくときの視点になる。

子どもとはこういうものだ、とワンパターン式に割り切るのと違って、このような見方によると、子どもはまったく多様な動きをしており、子どもを見ることがそのままこちらのまなざしの再吟味を要請してくる。たえず自分にはねかえってくる。

子どもについて、考えるというよりは、もはや子どもを通じて、考えるというのに近くなる。

S F 的読み解きは、これをさらに増幅し、あるときは執拗に、あるときは軽妙に、また別の場合は道化風に、手ざわりを楽しみつつパフォーマンスしてみることである。

(名古屋大学)

ある日——行為の意味の理解はいかにして可能かを考える

津守 真

一

子どもが遊ぶとき、その子どもの本来の姿——本質——があらわれることは、どの子どもにも同じである。

昨年から歩くようになった五才のA子は、最近、ボールで遊ぶ。私はしばしばA子とつきあう。保育室の小さな空間が、自分の仕事場でもあるかのように、その中でボールを追いかけるA子をみていると、人間にとってたいせつなことをここで学んでいるように思える。

二



朝、A子は保育室にはいると、まっすぐにはって、ついたての向う側にあるボールの箱にゆき、小さなボールをいくつも出す。そのボールをかかえるようにし、ころがると追いかけてつかまえようとする。私をみると、アーと云ってボールを差し出し、手を放す。ボールは私の方にくる。何回かくり返すと、私に床にねるように指示し、私が横になると、顔をつけて耳をよせる。私はAちゃんと呼ぶ。何回かやると、私を残し、またボールを渡し、手放し、ころがると追いかける。

私がA子の手をとって立ち上ると、A子も立ち上り、ボールを2個手にもったまま、覚束ない足どりで歩く。私は後向きに、A子の手をひいて、庭の方まで歩いてゆく。ボールを落とすとA子は立ち止り、拾い、または拾わせてからまた歩く。こうして歩きつづける。そのボールを床の上で手放してころがす。向うにころがるボールを、はってとりにゆき抱きかかえる。それをくり返す。

A子にとって、ボールは私の見るボールとは異り、だいたいな珠である。布のボールは口にもくわえるから、ボールはA子自身の一部でもある。そのボールを、自分の意志で四周に散らす。手を放れるころがっても、ボールはA子にとって存在しつづける。追いかけて、再び手の中にいれようとする。アーという他の人がころがしてくれて、ボールを呼びよせることもできる。

私はA子と毎日一緒に過しているから、生活の別の側面のことも思い浮ぶ。

食卓で、A子は、たべものをあたりに散らしながら食べていたが、このごろはおぼんの

中でたべる。かこまれた空間に物を集める。籠を差し出すと、手にもったボールをその中にいれることもある。かこみの内部の空間が意味をもち始めている。

これまで、A子は食物でも物でも、外に散らしていた。境界があることがいやで、境界をこえて、見えない手のとどかないところにまで散らしていた。ピアノをひいても、メロディをひくのはいやで、上と下の音階をはしまで音をひろげさせた。自分をとりかこむ四周は、温い光がさしてひろがり、自分はその中心に坐しているかのように思えた。

いま、A子は、ボールを手放しても、それは失われるのではなく、自分の範囲に属することがわかり始めている。ころがるボールを追いかけて、再び手にする。そしてまた手放し、それを自分のものにするのができるのをためしている。二週間前までは、ボールをもった手を上げて私に差し伸べるが、手放すことができなかつたのである。

赤、黄、白、緑、色とりどりのボールが、四方に散ってころがるのを追いかけるA子の相手をしていると、あきることなく、いろいろの思いが私の心にも往来する。だいたいボールを手放してもそれは存続しつづけることはわかっているのだが、それは自分の手のとどかないところに去ってしまう危機をも常にはらんでいる。それでもなお、A子は手放す。私にも同様の体験がいくつもあることを思う。娘を結婚させ、独立させたときにも似たような体験をした。きのうは、この四月に卒業させた子どもの母親が来た。公立養護学校の中等部にいったその子どもは、毎日のしみに学校に出てゆくという。愛する者をつまでも自分の手もとにとどめておこうとする心はだれにでもあるのだろう。しかし、そ

れを手放して独立させるのが対等な人間同士の関係ではないかと思う。外の世界は私の思うようにはならないし、危険もあるから、手放すのには時を要するし、慎重でなければならぬ。だが、外の世界も、人間の真実——神と云ってもよい——がはたらく場所である。ヒューマニティ——深い意味での人間性は、個人の境界をこえて存在するのであり、その意味で普遍的である。そのことを信じられるとき、手放す覚悟がなされる。

A子が手放したボールは、再びつかまえられるものもあるし、見えないところへ去ってゆくものもある。A子はあるところで消え去ったボールを断念する。自分の範囲から去ってゆくものに対して、それ自ら存続して生きる力と、外の世界の庇護を信頼して委ねている心との両方が潜んでいるように思われる。



幼児期の体験と大人の精神との間には、無数のできごとや体験があるから、直結させて考えることはできない。しかし、この幼時期の体験の基礎の上に、大人の精神は形成される。これをうめてゆく作業は、興味深い研究課題である。

### 三

子どもがボールで遊ぶ相手をしながら、その世界を共にし、いろいろと考えをめぐらすことは保育者のたのしみであるのだが、他人である子どもの行為について、大人が自身の体験から類推し、子どもにひきうつして考えることがどうして許されるのだろうか。

もう一度重複をおそれずに前に述べたボールの遊びの場面を分解して考えてみる。

これは「ボール遊び」とひとまとめにして考えることはできない。すでにのべたように、多くの内容がふくまれている。(1) A子が「ボールを追いかけてつかまえようとす」というのは、正確に言えば、A子がそうするのを私が見ているのである。私がボールを追いかけているのではない。私はいつでもA子に応答できるように備えながら、傍で見ている。すなわちA子の行動を客観的にだけ見ているのではなく、私も同様の行為をするならば発見するであろう意味をそこに読みとっている。自分が子どもの位置になって行為する可能性を前提として、子どもと私とは同時に同じ場面にいる。(2) 私がA子と連動して身体を動かすことによって、A子の行為に参与している。ボールをめぐる、ひとつの行為が両側から違った立場で同時になされており、ここでも両者は位置を交換する可能性

をもつ。だから相互に調節し合い連動して動くことができるのである。

歩行の最中にボールが落ちたとき、ボールのたいせつさが私にわかるから、私は立止って拾う。そうでなければ立止らずに通り過ぎるだろう。A子の歩行と同じ位に困難な状況にある場合を大人の側に想像するときには、何としても拾ってやりたいと思う。大人が自身の状況に転換させて想像することは、勝手な解釈どころか、子どもと連動した行為の中で必然的に生じる人間的知性であり、保育の実践を助ける。

A子がボールで遊んでいるのは、いわゆる「ボールで遊んでいる」のではない。たいせつなもの、保持し、手放し、追いかけて、再び手にとる行為をくり返しているのである。失われる危険をおかしても手放すことを試みている。もっと他の言い方を見つけて、A子ができるかもしれない。いずれにせよ、それはあとから大人が与えたことばであって、A子とはことば以前の行為をしているのである。ことば以前であるが故に、その内容はことば以上に豊富である。単純な言語化では、その行為の数は失われてしまう。

子どもは、身体的行為によって、人生を探究している哲学者である。傍にある大人は、その行為を自分におきかえ、その意味を深めるとき、子どもの内奥の世界に応答する者となる。

日日の保育によってそれは確かめられ、新たな展開をするので、毎日子どもにふれることができるときは妥当性が増す。

(愛育養護学校)

## 幼年期の意味するもの

本田 和子

昨年夏上映された劇場映画『漂流教室』は、映画としての作品の出来映えは別として、幾つかの点で興味深い問題を投げかけていた。その多くは、異能の劇作家榎津かずおの原作に負っているが、キャスティング、映像効果その他は、監督大林宣彦の抒情性に依存するところも少なくない。原作の衝撃性が甘くゆがめられたという批判はあるものの、そのゆえに浮かび上った親と子の問題や、現代における成長観など、私どもの目に示唆的と見えることがらを無視してはならないだろう。

とりあえず、そのあらすじを辿ってみよう。ドラマの



主人公は、翔という少年。外国人子弟と帰国子女とが学ぶ神戸アメリカンスクールに通う中学生である。そのアメリカンスクールが、ある日、突然、一九九名の生徒と、何人かの教師を抱え込んだまま、一瞬の閃光とともに消滅した。タイム・スリップして異次元に拉致されたのである。子どもたちを気付かって半狂乱となる母親たち。なすすべもなく絶望する教師たち。そして、何とか自分たちでその苦境を切り抜けようとする子どもたちは、とりあえず翔をリーダーに選んで、自治的に自分たちの生活を守っていこうと考える。残された大人たち、とりわけ翔の母親は、悲嘆にくれ、絶望し、諦めかけ、やがて、自分たちの手の届かぬところで新しい生活を始めたらしい子どもたちを信じることで、辛うじて希望を見出し、わが子とのコンタクトをまさぐり始める。

砂漠のような別天地で、危険と戦いながら自分たちの生活を築き始める子どもたちの群れと、翔のかたみとなったペンダントを握りしめて、願い、祈る大人たちの姿とを、交互に見せつつ、映画の幕は下ろされるのだ。



この映画が発信する第一のメッセージは、大人と子ども、特に母と子の関係が、「切断」という過激な手段を介して再生され得たということである。母は子を、変りなく抱きしめていたいと願いつつ、同時に一人前に立ち立て欲しいと望み、子もまた、母の膝に甘えていたいと求めつつ、同時に自分の足で好みの方向へ歩きたいと考える。結び付くことと切り離されること、この両極に引き裂かれるのが両者の関係に他ならない。

このことをめぐって、グレートマザーの両義性とか、あるいはダブルバインドなどと、様々な理論が展開されている。しかし、この映画は、それら母と子のダイナミズムを、タイム・スリップによる「切断」という形で、鮮かに処理して見せた。タイム・スリップして手の届かぬ世界へ漂流してしまった以上は、母も、子も、両者ともどもどんなに求め合おうと、あるいはどんなにいがみ



合おうと、どうにもならない形でそれぞれの独立を全うすることになるのだから。

考えてみるなら、母と子は、異世代を生きる者として、永遠に両者の時を共有することは許されない。子どもだけが母の知らない世界に入り込んで行き、母の知らない世界を生きるのだ。映画は、タイム・スリップという形で、この不可避の別離を衝撃的に映像化した。深く暗く巨大な穴の傍で、校舎もろとも子どもたちを呑み込んだ裂け目をのぞき込み、しのつく雨に全身を濡らしながら空しくわが子の名前を呼ぶ母親の姿が、この切断の無慈悲さと、残された者の悲しさをよく表現している。

親子の間に横たわるこの関係は、考えてみれば、人間の抱え込んだ基本的・根源的な主題でもあった。とりわけ、その主題に関して、母親が特権的であるのは、彼女は、「個体の分離」という事実と、それによって生じる課題とを、乳児と不可分に共有したからである。小浜逸郎の言を借りて、「母子の分離は、その事態に対するあらゆる文化的な色づけをとりはずしたかぎりでは、自立

した個体がそれまでもっていた完全性の喪失という実存的意味をもっているのであって、これはそれ自体として普遍的に祝福的なことをいうのでもなければ、あえて苦役にみちた現実だと思ってみる必要もない事態である。要するにそれは、分離してしまったことによって、その代償として関係的にあらねばならぬという、あともどりのきかない主題の出現をあらわしている」と言うことも出来よう。個体としての身体は、「出産」という「分離」によってしか出現し得ない。しかし、分離は、それまでの充分性の喪失であり、母と子は、両者ともども「欠除」を刻印され、結果として「結合」という形の充足を要求するというのだ。

「分離」と「結合」、この両義性において人間は肉体的存在となる。しかも、この基本的条件は、「出産」という形の、母と子の同時的な受肉によって発生するのである。従って、人生という経過する時間の中で、母と子の間に生じる葛藤のあれこれが、その節目として刻印されるのも、無理からぬことなのだ。深層心理学者たちが分

析して見せるように、各地に分布する神話や昔話は、成長の途上に「母親殺し」を敢行する若者の姿を描き出し、「分離」と「結合」というこの主題が、人間に課された根源的な主題であると告げているではないか。

ところで、『漂流教室』に視線を戻すなら、変化の速度の速い現代は、この根源的な主題との取り組みに、一きわの困難さを増し加えさせているように見える。子は、子自身の時代の速度に身を委ねる。しかし、それが、恰かも必要以上に分離を促進するかに見えるとき、親にとって承服し難いものになる。つまり、「子どもがどん／＼離れ去っていく」という歎きと憤りを誘い出し、つなぎ止めようという力を引き出してしまふのだ。

パソコンに象徴されるテクノロジーの時代、ビル群に代表されるコンクリートの時代、そして、人工衛星で示される宇宙の時代、様々に言い立てられるこの変貌の時代に、戸惑いと不安を隠し切れぬ親たちに比して、子どもたちは易々とそれに適応し、変化の速度を共有して事もなげに駆け抜けていくではないか。「子どもがわから

なくなつた」と、親世代を憂えさせるのはこの所以であろう。

親世代は、何とか子どもを繋ぎとめようと躍起になる。映画の冒頭で提示された母と子の葛藤は、それを物語る。日本語を学んで日本人らしくと督励するのは、母世代の価値観へと、子どもを繋ぎとめる行為である。子どもにとって、そんなことはどうでもよいにもかかわらず……それでいて、母の口からは、「しっかりと」「早く」「自分でちゃんと」と、息子に一人前に振舞うことを求める叱声が、次々とこぼれ出る。そして、最後に投げ付けた科白が「出て行きなさい」の一言。この一言は、母にとって終生の悔いになるのだが、しかし、母の内に潜むいま一つの本音でもあった。別世界の異邦人たる息子たちと、いつまでも時間を共有することは出来得ないのだから。

反抗し、背を向け「帰ってくるもんか」と捨て科白まで口にして飛び出していく息子。彼にしてみれば、外国で育ったから日本語が苦手で、日本的な生活になじめな

いのは当り前すぎるくらいに当り前のこと。何故そんなに怒られねばならないのか。「しかたないじゃないか」「望んで外国で育ったわけじゃないのに」と、彼は母との間に一線を引く。両者に横たわる越え難い裂け目に、先ず気付いてしまったのは息子の方かも知れない。

両者のいさかいを見ていると、加速度がついて動き続ける時代と、そのゆえにあらわとなる世代間の問題が、いや応なしに意識させられよう。母たちの立つ地盤と、子どもらのそれとは、異なった速度で動いているのだ。「わかつちやいなんだもん」と呟く子どもたちの耳は、二つの時間が、それぞれに異なった速度で流れ続けるその音を、もの憂く抱えているのかも知れない。

タイム・スリップという形で出現した異常事態は、「分離」と「結合」という根源的な主題を前にして、その取り組みに感う現代の母子に対して、鮮烈につきつけられた一つの答ではないだろうか。恰かも天災のような不可避性、絶対的な訣別……。新しい事態を認めて、すばやく対応を開始するのが、母たちにまして子であると

は、「時代の速度」によって鍛えられ、不可避の断絶に自覚的であった子世代のありようを物語るだろう。もしかしたら、タイム・スリップとは、神話の主人公たちの「母殺し」に代るものではないか。心優しき現代のヒーローたちは、母に立ち向かうのではなく、彼女たちを置き去りにして、時の彼方へと旅立って行くのかも知れない。



ところで、このドラマの中に、一人紛れこんだ「三才」の勇一だけは、母の許に帰る機会を与えられていた。翔の後にくっついてきたら、タイム・スリップに巻き込まれたというこの幼い者は、そもそもから「異邦人」である。本来はいる筈のない所、すなわちアメリカンスクールの校舎の中に、何故か紛れ込んでいるのだから。しかも、水のない砂漠のような世界での明け暮れにも、彼だけはいつも洗い立ての爽やかさで、ニコニコと

笑っている。「あの子だけ、どうして砂にも塵にも汚されないのだろう」と、他の子どもたちはいつも不思議がった。

そして、彼だけが、光の龍巻きに身を委ねて、もとの世界に帰っていった。「君はまだお母さんが必要なんだよ」という翔の言葉に送られ、翔から貰ったペンダントを胸にかけて……。残された家族たちは、勇一の帰還と胸に揺れるペンダントによって、子どもたちの無事を知ると同時に、子どもたちが手の届かない世界に行ってしまったことも……。しかし、彼らは幼い勇一を囲み、彼のあどけない呟きに耳を傾けることで一種の安息を見出すのだ。子どもたちの独立を信じ、それを祈念しようという母たちの解決は、勇一によってもたらされたとも言えよう。

母と子の関係や思春期のありようをめぐって、ラジカルな問いを連発したこのドラマは、しかし、幼い子どもに関して、極めて伝統的な幼児讃歌を奏でて見せた。「七才までは神のうち」、彼らは、どんな時代にも、どん

な状況下にも、変ることなく「異邦人」であり続ける。

つまり、時代や状況によってもたらされる、あらゆる束縛から逃れ得てい、様々な限界から自由であり得るということなのだ。勇一だけは、ニコニコと、何の苦勞もなく、二つの時間を往還した。タイム・スリップした翔たちの時間と、残された母たちの時間と……。そのいずれの時間の中にも、彼はやすやすと入り込むが、同時にどちらの世界でも特別扱い、つまり「異邦人」なのだ。

伝統的社会は、この「異邦人」に、「神のうち」というしるしを与えた。七才を境として、産神から氏神へと守護神が移行するという民間信仰のあり方は、共同体への仲間入りの節目として、「七才」が特異化されていたことを物語ろう。そして、共同体は、この労働人口にも入り得ず、共同体の成員外である幼い者たちに、神事に携る者という特別の役割を付与した。幼い者たちは、神を招き神を迎える導師として、あるいは彼ら自身が神のよかし依代となつて、祭式時に欠けがえのない責務をになわされたのであった。

伝統的社會で「異邦人」と記号化され、そのゆえに「神のうち」と聖性を付与されて、独特の位置を与えられてきた幼い者たちは、私どもの社會で、どのような變貌を遂げたのであろうか。結論を急ぐなら、大まかに言つて、彼らの地位はさほどの變化を見せてはいない。何故なら、「子ども期」の解体、「子ども」と「大人」の關係の變化など、様々に論議の対象となる現代にあつても、「幼児」と呼ばれる幼い人たちに關しては、さほどに言挙げされていないではないか。

生育環境がこれほどに變貌する。すなわち、木や土に代るコンクリート、映像の氾濫、人工的な衣類や食物などに囲まれて育つ彼ら。その成長ぶりや、生活感覚が、かつてと同じであつたらむしろ不思議であろう。従つて、當然のことながら、それらとの關係での變貌が、彼らの上に現われるのは自明である。

しかし、にもかかわらず、人生の最初の時期を生きる「幼い人たち」と、私ども大人とが取り結ぶ關係のありようには、何ほどの變化も見出せないのではないか。

「幼い人」の上限に多少の移動があつたにせよ、彼らは依然として制度の外に置かれ、秩序社會の「異邦人」と記号化される。以下に、現状での異人ぶりを、現代社會との關係で指摘しておこう。

子どもが變つたと欺かれるとき、變貌の指標として選ばれるものの一つが、遊びの減少である。しかし、これは、彼らが、かつて大人たちが遊んだ伝統的な遊びから遠ざかり、代りに、パソコンやハム、あるいはサッカーなど、新しい遊びに没頭するということである。コンピュータやワープロは、もと子どもだった大人たちにとつては、真剣にマスターせねばならない新しい道具であつて、とうてい遊びとはなり得ないのだが、彼らはそれを易々と遊んでしまう。子世代と大人世代は、共有し得ない「遊び」を間において、その断絶をかみしめる。

しかし、このとき、幼い人たちは兩者を結ぶメディアーターである。彼らは、機会さえ用意すれば「かごめかごめ」や「鬼ごっこ」など、昔なつかしい伝統遊びにも打ち興じ、また、一方では、パソコンにもなじんで見せ

て両界を往還する。子どもたちが、人よりも機械を愛することが話題となり、人間性の危機とそれが憂えられるとき、幼い人たちは依然として大人の膝にすり寄ってくるし、抱かれることを好み、柔かい頬をくつつける。手はつなぐものとはばかり大人たちの両掌を求め、足は跳びはねるものとばかりに軽やかにステップを踏む。

何といっても彼らは頼りなく弱く、そして、あどけない。大人の保護と愛撫が必要な存在であることに変わりはない。抱き上げ、食物を与え、依類を整え、よくも悪くも大人の思いのままに扱える対象。というわけで、幼い人たちは、依然、「対等の人」としてではなく、「愛すべき天使あるいはペット」のように位置づけられる。ただし、この「ペット」には、格別、マイナスの意味はない。大人が、一方的に愛着行動を表明し、実現し得るという意味で、幼い人は常にペット的でもあるのだから。

彼らは「義務教育」の外にあることで、近代学校教育「の外にあることで、近代学校教育という巨大装置から自由であるし、制度的拘束のゆるやかさを利用して、

幼児教育もしばしば教育界の「異邦人」たり得る。結果として、彼らは時代を超え、時流に流されない。というより、日常的現実を足を下ろしていないから、彼らだけの「特別の現実」を、いつでも、どこでも、享受してしまうということかも知れない。

『漂流教室』は、幼い勇一を、ただ一人の帰還者として特別に描き出すことで、現代における「異邦人」ぶりを鮮明にして見せた。しかも、彼が翔のペンダントを胸にかけ、ニコニコと母の許に帰り着いたことで、大人たちの上に安らぎが訪れている。彼は単なるメッセージャーだったのではなく、救済者でもあったのだ。置き去りにされたものを慰め、一沫の希望を与え……。翔の両親やその他置き去りにされた親たちが、幼い勇一を囲んで静かに団欒する情景は、安易なこしらえものの感はあるものの、やはり象徴的であろう。この情景は人にとって「幼いもの」が存在することの意味を甘美に謳い上げ、どのような時代にあっても、それは不変であると訴えているのだから。

(お茶の水女子大学)

# 落とし穴

はるにれの会

山本 奈緒

「おかべえー。」

という、子どものかわいい声が聞こえました。A幼稚園のそばを通りかかった時のことです。もう一度、その子は大きな声で先生の名まえを呼んでいました。「岡部」と呼ばれたその先生は、背が高く若くて、はつらつとした男の先生、つまり保父さんです。岡部先生は、

「なんだよう」

と、にこにこしながら親しげに子どもに話しかけ、そばにいたお母さんにもにこにこしながらあいさつをしています。

す。何だか、見たくないものを見てしまったような気がします。私は足早に幼稚園の前を通りすぎました。

A幼稚園は、この附近では、たいへん進んだ幼稚園と言われています。鼓笛隊や音楽教室をもち、勉強を教える幼稚園が多い中で、この園は遊びを中心とした保育を掲げ、子どもたちを自由に遊ばせ、その中から個性を引き出そうという教育目標で保育が行なわれています。子どものやることには、あまり口出しをせず、自分たちで作ったグループを生かし、なるべく子どもにまかせよ



う、子どものやる気が出るまで待とうという方針で園が運営されていると聞きました。在園の子どもたちだけでなく、卒園していった子どもたちも「子ども会」という形でめんどろを見て、地域の子どもの遊びりに貢献しようとしています。同時に親たちの教育も行なわれているようです。講演会がしばしば開かれ、

「細かいことに、あまり口出しをしてはいけません。子どもの個性がつぶされます。子どもは本来、内部にすばらしい個性と可能性を持っています。なるべく親は口出しをせずに、待ってあげましょう。何時間かかってもいいではありませんか。小さなことはあまり気にせず、子どもに自由を与え、大きな目で子どもをとらえていきましよう。そして、子どものよいところを見つけ、ほめてあげましょう。」

というようなお話がされる、と聞いています。親たちのサークルもたくさんあり、みんな仲良く助けあっているようです。

それだけ聞くと、とてもすばらしい理想的な幼稚園な

のです。そして実際にそのとおりに実践されているようですから、先生方の御苦労もたいへんだらうと思えます。実は、私は、その幼稚園から来る子どもたちを受け入れる側の学校にいます。どんな個性豊かな自主的な子どもたちが来ることだろうとお思になるかもしれませんが、

ところが、ところがなのです。その幼稚園から来る子どもたちは、一様に目がおどおどし、自信がなく、悪いことをしてしかられると、ごまかしたり言いのがれをするか、黙りこんで石のようにかたく心を閉ざしてしまうのです。中には元気な子もいますが、落ち着きがなく、先生や友だちの話が聞けず、いつもバカさわぎをしています。そして、子どもらしい無邪気なところや一生懸命になることが少なく、どこかさめていて大人のミニチュアのような感じのところが多いのです。その子どもたちがそういう性格だから親がA幼稚園を選んだのか、A幼稚園で育ったせいなのかは、私にはわかりません。けれども、現在の学校のかずかずの問題点を差し引いても、

A幼稚園が目ざしている子ども像とはおよそかけはなれていると言っていると思います。

その子どもたちの親は、たいへん教育熱心ですが、決して勉強をおしつけるのではなく、むしろ勉強は二の次で、低学年のうちは遊ばせようという方針です。もちろん子どもの良いところをたくさん見つけて意図的にほめたり、道徳的なことや情操教育にも熱心です。子どもにさまざまな体験をさせるため、日曜日や夏休みにはいろいろなところに連れて行ったり、キャンプなどに参加させたりしています。子どもを理解しようといっしょにけんめいで、比較的子どもの教育についての知識も豊富で、考えもしっかりしています。すばらしいお父さんお母さんなのです。ところが、どのお母さんも、自分の子どもが思うように育たなくていらいらしています。いったいなぜなのでしょう。

私も教室で同じような経験をしました。子どもたちは、何も言わなければ、とにかく落ち着きがありませ

ん。授業で考えを深めるなどというのは、およそ遠いことのように思えました。少しきびしくすると、子どもは能面のように表情がなくなり、石のように固くなりま

す。何とか口を開いてもらおうと、冗談を言ったり興味の持てるような学習内容を工夫したりして態度をやらわかくすると、たちまち教師の心の中までずかずか土足で入ってきます。先生をあつというまに友だちにしてしまい、節度がなくなりま

す。私もはじめは、子どもたちとなれ合うことが子どもたちと話し合っていることのように思われ、にこにこしていました。子どもの気持ちをつかみとり、子どもを傷つけないように気をつかいました。ちょうどA幼稚園の岡部先生のように、子どもとのかべをとっぱらってしまいました。小さな事にこだわらずに、子どもを自由にさせ、私に心を開いてくれるのを待ちました。けれども、なれあって、子どもと仲良くなっても、決してその子どもの本心を引き出したり、やさしさや真剣さを見ることができませんでした。むしろ、子どもたちは、坂道をころげおちるように荒れ始め、無気

力やいじめの温床を作っていたのです。いじめや集団万引が発生したのも、ちょうどその頃です。私がいらいらしてしかると、今度は悪意の目と共にかたく口を閉ざしてしまうのです。子どもをあるがままに理解しようと努力し、子どもたちになるべく自由を与え、個性を尊重し、子どもたちが気軽に話し合える雰囲気を作ったのになぜだろう……新任教師で金八先生を目ざしていた私は、深い森に迷いこんでしまいました。自分の考えそのものに、どこか大きなあやまりがあるのだろうか。それとも現在の学校教育に問題があるのだろうか。どうすれば本当の子どもの姿を引き出し、健全な成長を促すことができるのだろうか、わけがわからなくなってしまいました。ただ一つわかっていたことは、何かがちがうという勘のようなものだけでした。迷いは数年続きました。

ところがある日、大きなヒントになる出来事がありました。娘が中耳炎になり、耳鼻科へ行った時のことです。待合室に入ったとたん、大きな声とともに男の子が

目の前を走りぬけました。五歳ぐらいのその子は、待合室を運動場のようにして遊んでいたのです。

「やめなさい。」

という、やさしくもなくきびしくもない機械的な声が聞こえました。見ると、その子の母親らしい人が、文庫本から目を離さずに注意をしたようでした。子どもは見向きもしません。再び文庫本から目を離さずに、「やめなさい。」という機械的な声がしました。子どもは、あいかわらずです。そういうことが五回ほどくり返されたあと、お母さんは、やおら立ち上がりその子のところへ行くと、

「何回言えばわかるの！」

と、どなって、突然その子をぶったのです。大きな泣き声が、待合室中に響きわたりました。おそらく、五回の注意の間、お母さんはがまんのがまんと重ねていたのでしょう。冷静に「やめなさい。」と言って、子どもがやめてくれるのを待っていたのだと思えました。決して文庫本がおもしろかったのではなく、人前もあることだ

し、子どもをしかる姿を見られるのもいやだったのです。よう。いえ、子どもに言ってきたかせるのがめんどろだったのかも知れません。どちらにしても、その母親は、五回の「やめなさい」の間、たいへんいらいらしていたのだらうという事は、最後の爆発で容易に想像することができました。ところが、子どもの立場に立っていると、お母さんがそんなにいらいらしているとは気づきようがありません。よっぽど母親の顔色を見ながら暮らしている子を除いては、機械的な「やめなさい。」の連続では、本当にやめた方がよいのだとは感じなかったと思います。それどころか、お母さんの怒った声が聞こえないのですから、半分承認されて遊んでいると思っただけかもしれません。それなのに、突然の怒声とひら手うちです。子どもにとっては、おそらく何をしかられたのか、なぜお母さんが突然怒っているのかわからなかったと思います。五回の注意の間にお母さんのボルテージが上がっているとは夢にも思っていなかったのですから。

もし、一回目の時、子どもの目を見ながら真剣に、

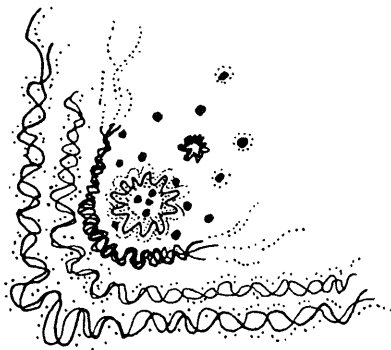
「みんなの場所だから静かにしようね。いっしょに本でも読みましょう。」

と言っていたら、たとえ展開は同じだったとしても、子どもの心への響き方は違っていたらうと思います。

何だか、見えてきたような気がしました。私も同じことをしていたのだと……。集団の中では静かにし、他人の迷惑を考えるというような「大人にとってごくごくあたり前」のことも、子どもには、その都度教えていなくてはならなかったのです。「あたり前のことができない。」とただしかつてはいけなかったのです。そのたびごとに約束を確認していかなければならなかったのです。その約束が、あやふやなまま、子どもの自主性？を待たせていても、大人のストレスがたまるだけです。それどころか、子どもは、大人の感情的な怒りの爆発に自信をなくしていきます。いったい自分は、どうすればよかったのか確信が持てないからです。そして次第に子どもの口は固くなっていきます。本当の声が出せなくなり、ギャグを言ったりふざけたりというところでは異常なまで

に明るく大きわぎをするのに、ひとたびまじめな話になると、口をつぐんでしまうのです。だって、子どもたちは、何をどう答えていいか自信がないんですから。自分が適当に言ったことにも真剣に言ったことにも、ただほめるばかりであったり、突然火山の爆発のように怒り始めたり……。大人の気まぐれにどう対処すればよいのかわからないのです。

大人には、「子どもにも教えこむ」のではなく、社会を見て「気づいてほしい」という期待があるのかもしれない。もしかしたら、「戦争中の迷いもなく教えこむ教育」や「暗記偏重の教育」への反発が、その期待を生み出しているのかもしれない。しかし、大人の背中を見て、いつか気づいてくれるだろうという期待には、限界があります。最低限のルールは、くりかえしくりかえし教えていかなければ、子どもは自信を無くすばかりです。子どもの自主性や自由にだけまかせていたら、子どもたちには、行動のよりどころがなくなってしまうのです。



もし、私たちが、ルールをはっきり知らないスポーツに、とび入りで参加させられたらどうでしょう。およそのルールはわかっているけれども、確かなルールを教えてもらわないで参加して、果たして自信いっぱいになれることができるでしょうか。正しいルールを学び、そのルールのもとで何回も練習し試合に臨んでこそ、自信もつき個性も発輝できて、向上心もわくというものです。あやふやなルールの中で、努力もしてないのにほめられ（自信を持たせようとはめてくれるのです）自分のプレーがいいか悪いかもわからずただちやはやされて、ある日突然「何回もやってるのにまだ気づかないのか。」と感情的に言われたら、私はさっさとそのスポーツから手を引くでしょう。でも、人生というスポーツでは、そうやすやすと手をひくわけにはいきません。となれば、だんまりを決めこむしかないわけです。A幼稚園の子どもたちが、どこかおどおどし、話をごまかし、バカさわざるのがわかるような気がしました。

それがわかってから、まず私は、子どもたちに正しい話し方を教えていねいに指導していきましました。こういう場合には、こういう話し方があるというようなことを、折にふれ説明しました。時には、泣きじゃくる子にも、無理矢理話をさせることもありましました。その結果指名されて黙りこむ子は一人もいなくなり、次第に自分を表現するようになりました。また、こんなこともありましました。クラスに自家中毒の子どもがいました。その子が吐いた時最初は「オエー」と言って逃げ回る子が大半でした。私は吐物を片付けながら片付け方を説明し、「オエー」という声を出してはいけないという最低限のエチケットを静かに教えました。翌日、再びその子が吐いたという知らせを受けて教室へ行ってみると、きれいに片付けていました。片付けた子どもを、みんなの前でほめました。その子どもたちは、片付け方を知ること、ただ気持ちが悪く「オエー」と言っていた自分の気持ちのりこえたのです。のりこえた喜びとともに先生にほめられたのです。その日から、その子どもたちの目は輝

き出しました。自信がついたのです。自信は、大人がただはげましたりほめたりしてつくものではないのだなあとしみじみ思いました。何かつらいことやいやなことをのりこえた充実感があって、そこでほめられてこそ、初めてついていくもんなんだなあ、なあんた大人と同じだ、と遅ればせながら気づいたのです。今までは、子どもがのりこえなければならぬほどの無理は要求してこなかったなあと反省しました。

翌日、自信をつけた子どもの数がまた増えました。子どもたちの目は、日に日に輝き出し、はつきりと正しいことを話すようになってきました。まじめがバカにされる風潮の中、やっぱ子どもは、まじめに自分をのりこえることに喜びを感じるのだという素朴な発見に、熱くこみあげてくるものがありました。多分、ここから、自主性も個性も可能性も芽ばえてくるのでしょう。

最低限のルールや基本的な練習のやり方を教え、とにかく試合に参加させるところまでは親や教師の仕事です。そこから悩み苦しんで自分らしさを見つけ個性を発

揮していくことが子どもの役目です。そうなった時、大人はもう口出しをせずに子どもにまかせ、反則でピッと笛のふける、目の肥えた審判になればいいのです。「個性の尊重」「子どもの自主性にまかせる」「よいところを見つけてほめる」という表現をさまざまなところで目にします。けれども、この美しい言葉の裏には、大きな深い落とし穴がひそんでいるのです。



冬から春へ

— 無患子 むくろじ —

蕪木 寿江

むくろじ



朝顔の種を丹念に取っていたR子が話しかける。

「ねえ、先生、秋は夏をちょっと連れて秋になったの？」

「――」

「だって、朝顔は夏でしょ？」私は笑ってうなずく、その自然な発想に感心していると、言葉が湧きでるように「いっぱい咲いてたおしろい花もそうだ。毎日、毎日、ビニールの袋に色水をつくって、おうちへ持っていったもんね」草花をというより灌木のような装いのあるおしろい花は、その花の色といい量といい取り安い高さといい、この花は取ってもいいという親しさが加わって、よく遊んだ。残りの花が一つ、又一つと、思いだしたように咲く中で、黒い小さな実をみつけ、爪で割っては白い粉を顔に塗る。「つるつるするよ」と言って、友達にも同じことをさせる。「先生の顔も白くなるよ」と、割ってくれる。「みんな、見て見て、先生の鼻の頭白いよ。」と喜ぶ。実がなくなるとその枝ぶりからおしろい花の木はパチンコになって、ボール紙でつくった玉を寒空に向かって飛ばす。

R子、六才、二才上の気弱な兄がいる。背も高く体力があるが、逆上りができない。登園すると寒くても鉄棒が空いていると飛んでいって練習する。五月生れで、物ごとの理解が早く、友達をリードしながら遊ぶことが好きなので、不得意なことがあることがよい場合がある。ちょっと助けてあげるとできるのだが、要領をつかむまでに時間がかかる。

「Nちゃん、上手だね」「Mちゃん、昨日できなかったんだよ」と、くやしがるが、逆上りそのものよりも、先生に支えて貰うことの方が嬉しいようなR子だ。年少の時から些細

なことに怒りを爆発させては、周りの友達をあたりかまわずぶったり、椅子や積木を投げた。先生がとめると先生を蹴とばしあざができる程だった。

年長になった六月下旬、教育実習生と迷路をつくって遊んでいると急に怒りだし、せっかくの積木の路をこわしだした。一生懸命に説得しているのに怒りはつのるばかり。遂に、「お前なんか幼稚園の先生になるな、あっちへいけ——」と叫んだ。

「ここは行きどまりにしようと言うので積木を横においただけなんです」と実習生は青ざめて呆然と立ちつくしていた。「子どもは誰でも気分転換の名人だから大丈夫よ」と言っただけのもの、まだ積木をふり上げていたので、外の子どもの達の方にいくように促した。迷路を全部こわすといくらか治まったような顔つきになった。私はだまって背中を撫でていた。それがぎっかけのようにR子の暴発も続いて三度あった。部屋で遊ぶより、美しい自然に助けられた方がいいという思いがいつもあるので、なるべく園庭で遊ぶように心がけたが、鬼ごっこをしていた筈のR子が急に怒りだした。しかしそれは短くすんだ。最後は一番前の真中で紙芝居を見ようとして、そこに座っている友達の中にあとからきて割り込み、椅子をとって泣かせてしまった。こちらが少しでも怒って注意すると、すぐその心をつかんで怒りに対する抗議をする。全く鏡のようなものだ。全身で自分の知識と知恵をしばって悪い言葉を矢つぎばやに並べる。R子の涙を自分のハンカチで拭いてあげているT先生に向って、「お前なんかやめちまえ、死ね——」と泣き叫べんだ。「R子ちゃん、どうしたの」と声をかけにきた他の先生にまで、「お前なんか関係ないだろう。あっちへ行け

——」とどなる。R子に写るものは、困惑している先生の像と、自分への不信感を抱いている大人の表情だけが克明に見えるのだろうか——。廊下の隅でしばらくお互いの涙を見ているうちに少しずつおさまってくる。母親に話しても、「又、やったんですか……うちの子はそうなんですよ」と、慥然とした表情で、「悪いのは幼稚園」とでも言いたそうな口調でしかない。お迎えにきてても、手をつないで帰るわけでもなく、お母さんの足早やのあとを走ってついていく後ろ姿を何度もみた。家庭と幼稚園が両輪であり、同じ目的に向ってこの大切な幼児期を過ごさせたいと、月に一度の母の会を設けて話しているが、人に言われても解ろう筈がなく、自分で納得し、自分が変わらない限り子どもを変えることはできそうもない。T先生のやさしい涙に心が動いたのか、それ以来あの怒りはどこかへいってしまった。

「ねえ先生、冬は秋を少し連れてきたね」と、無患子の実を取りながら話しかける。R子の素直な発想の展開に感動してうなずきながら笑いかける。

十周年に苗木を戴いてから十二年経って実を沢山つけた。去年は二、三十個程だった。今年も千個近い数である。

友達が無患子の皮をむいていたら、丁度前にいたA子の眼に汁がとんだ、R子と背の小さいA子とは大の仲良しで、すぐに自分のはんかちを眼にあてさせていた。「痛い、痛い——」と言ってA子は泣きだし、私はあわてて蛇口を上に向けて眼をパチパチさせた。それでも癒らずしばらく泣いていた。今までのR子だったら、汁をとばした友達を怒り散ら

していただろうに——。困っている友達にも、「わざとやったんじゃないからね」と慰める言葉をかけているのだ。

だんだん無患子の実が茶色になって、からからと音をたてすけて見えるようになった。「乾いてきたんだね。汁がとばなくなったね」と、それでも加減して皮をむき「石けん」「石けん」と言いながら泡の中から黒い実を洗いだす。早速その実で、羽根をつくる。千枚通しでは小さい穴しかあかず、一枚のリボンをやっとさし込んで、ボンドでとめる。

「もっと太いもので穴をあけないと駄目だね」「羽根が飛びすぎるよ」「もう一枚つけよう」「まだ飛びすぎ」「もう二枚つけよう」とリボンをセロテープでとめていく。牛乳のキヤップの上のビニールで実をくるむ。しばらくついているがすぐ切れる。今度は二枚重ねて包む。以前は女の子の遊びであったが、今では男女を問わずその音に魅かれてか、白い息が飛び交う。「ひと一つ、ふた一つ」の繰り返しでなかなか「みっつ」の声は聞けない。男の子がバットののように羽子板を持って投げ合うように打つ。「よっつ、続いたよ。上手だね」とR子は友達のことをよく感心する。

「無患子」とは、なんとという素敵な名前だろう。誰がつけたのだろう。「患いの無い子に育つように」と、新年を祝ってのことか——。お正月が過ぎると羽根つきも一段と上手になってくる。子どもが好きな遊びは先生も好きだし、先生の好きな遊びは子どもも好きなような気がする。先生になる人は、幼い日にいっぱい遊んでいた人がいい。凧と隔年に羽子板をつくるが、子どもがつき安い巾と軽さ、大きさが望ましい。細い小さい既製の板

は、値段は安いが今一步という気がする。

「ねえ先生、春は冬を連れていってしまおうね」R子が窓を見ながらしみじみ話す。近くの川（鶴見川の上流）のゆりかもめの数が減ってきた。一羽が舞っているのを見たのは十一月であった。光りを集めて飛んでいるように見えた。一羽を見つけた日、R子は一人、一人に「ゆりかもめ見た？　こんど飛んでいたら教えてあげるね」と言って歩いていた。

子ども達と一緒にいた無患子もすっかり葉を落し、春への準備を始めているのだろうか。

ぶらんこ揺れ無患子の花ひそやかに

無患子の緑のままにこぼれけり

無患子を奪い合っては分けにけり

枝に残る無患子の実の珠玉のごと

(市ヶ尾幼稚園)

## 子どもの会話 (その六)

無藤 隆

### 一、会話と会話を越えるものと保育

本連載では、これまで、幼児の会話のいくつかの場面に例を取り、見かけとしてはかなり違った場面でありながら、共通の原則が見られることを指摘してきた。本稿では、そのまとめとして、改めてその原則を整理し、さらに、会話を越えるものとの関係を考えよう。そして、会話の問題が広い意味での保育作用とどう関わるかを検討する。すなわち、

幼稚園や家庭で大人が子どもとやり取りをする中で、必ずしも意図せずに、何をどのように教えあるいは育てているのか、また、大人が主になって作り出した場としての家庭や幼稚園に存在する要素、特に友達との会話やおもちゃ・遊具との関わりが子どもにとってどのような発達の意味をもつのかを考える。そのためには、実は、この会話そのものの分析だけでは不十分なのであり、その背景をなす「生活文化」との関わりを捉えなければならぬのである。会話の研究は、文化の検討と絡めるとき、本当の意味で、保育の問題につながるというのが私の現在の考えである。

## 二、幼児の会話に見られる原則

ここでは、幼児の会話でこれまで検討してきた所で気づかれた原則を述べる。この原則は、幼児特有のものというより、実は、大人の会話においても共通に見られるもののはずである。しかし、その見かけは異なっているし、年齢的な変化を問題にすれば特にそうである。また、場面や会話の内容によっても様相はかなり異なる。会話の研究としては、根底にあると思われる原則を抽出すると共に、その原則が具体的な場面と内容において、どのように現れ、他の原則と組み合わされ、また保留を受けるのか、その方式を明らかにする必要がある。そして、幼児の場合、特に、原則をかなり初期から何がしか把握しているらしいのだが、それにしても不十分に違いなく、どの点で不十分なのかを解明することが重要な研究目標となる。

会話の原則として、次に順次挙げていき、検討しよう。会話は、何より、協力である。会話は相手の出方に応じて行うことなのだから、その意味で協力であるのは当然である。しかし、出方に応じるといのが何を意味するから簡単なことではない。

まず、相手が、何かを言ったら、次にあまり時間を置かず別何かを言う必要がある。そうでないと、一方的な独話になってしまう。これは、きわめて当り前の原則であるが、幼児は必ずしもいつも守っているわけではないようだ。返事をしなかったりすることも多い。しかし、それはこの原則がわかっていないのではなくて、例えば、自分に言われたのだということがわかっていないとか、話はもう終わってしまったと思っているとかの可能性が高い。また、もっと細かく、相手の表現が質問だということがわからないとか、相手の表現が単なる記述であり（例、「暑い」）、そういった記述に対しては同感などのコメントを述べるべきだという大人の規則をまだ獲得していないということもある。

むしろ、この原則の獲得は大変早いのであって、二、三か月の乳児が母親と「おしゃべり」をするあたりにすでに成立している。互いに声を出すということが見られるのだ。もちろん、乳児は気が散り易いから、長続きするとは限らない。それにしても、見つけ合いながら、交互に声を出す所に、会話の原型があり、そう見ることが出来るのは、複数の人間が、声を用いて協力するという形がそこに発生しているからである。

次に問題になることは、言葉の中身である。相手の発話の内容と関連したことを述べる必要があるし、話始めの場合、どこからその話題を思いついたのかを示す必要がある。質



問をされたら何かを答えるべきであるし、答えを思いつかない場合、その旨述べるべきである。このことについての規則は多くあるが、幼児は徐々に獲得していくようである。いま詳細を省く。

このような個々の発話の対応と共に大事なものは、発話の流れ全体の主旨に発話を関連させることである。必ずしも相手の発話そのものとうまく対応していなくても、全体の流れにならなっていることは幼児の場合よくあることである。例えば、いま、積木を用いて、ロケット遊びをしているのであれば、子どもの発話はそのロケット遊びの文脈で解釈されるのだし、ロケット遊びを發展させるためになされる。

ここで、協力とは、遊び全体を一緒に成立させることを意味することになる。むしろ、会話は、遊びの全体へと子どもたちが参加する手だてなのである。言葉は、遊びの世界を成立させるのに用いられ、その世界のあり様を互いに調節するために発せられる。

子どもの共同の世界は無条件に成立するわけではない。おそらく、基盤は、体を介し、声を交流させ、つまりは、感情のふれ合いと融合にあるのだ。その上に立って、もつと個別の世界を子どもたちは作り出す。多様な輝きと、様々な色合いを持つ世界である。その世界は、言葉によって作られていく。言葉が個別性を世界に与え、しかも会話者間での個別性の交流を可能にするからである。

と同時に、この言葉は、決して、それだけで成立しているのではなく、体と具体的状況を通して意味を獲得するのである。他者に関わろうとする体の姿勢、身振り、声が言葉を

会話の中の言葉とし、具体的物理的状況を見て取り、その関わりの中での意味を引き受けてこそ、会話の流れの中の発話となる。この「関わり」が、協力の核であり、つまりは会話することに他ならない。

そして、関わりは、「世界」と関わることなのである。協力し、共同の世界を作り出すことが根本なのである。なぜならば、その世界が人と物とそして言葉に意味を与えるものだからである。

### 三、生活文化の中の会話

会話は、会話者間で成り立つものであるが、その背景として、様々な生活文化を負っている。このことは、会話全てに言えるが、とりわけ、保育を、保育者と子どもの会話、また、子ども同士の会話を促すこととして捉えるとなおさらである。

第一に、会話は必ず特定の場において生じている。それは、例えば、幼稚園の砂場であり、またホールの積木のコーナーである。そのことによって、場の「文化」によって拘束を受け、子どもたちはその拘束を遊びへと組み込んでいる。

砂場は、庭の隅の四角の砂の集積されている場所であるが、同時に遊びの伝統を備え、その伝統を支えるべく、設計されている所である。すなわち、砂がさらさらとし、水を加えるとどろどろとなり、堅めると堅固なものであるという特性を利用して、子どもは、手やスコップで砂を掘り、そばの水道からバケツで水を運び、砂に流して、「ダム」

にする。砂場での会話は、このような砂遊びをするために行われ、砂遊びをすることで発  
生する。砂場での会話とは、砂遊びという文化を実践することに他ならない。

砂場での会話を通して子どもたちは、砂遊びという文化的伝統の実践に参入するのであ  
る。そして、前節で述べた通り、会話をすることは、一つの世界を作り出すことである  
が、その世界は、この砂遊びという文化的実践の一つのバリエーションとして、ある特定  
の砂遊びの中の世界を作り出すことから生まれる。と同時に、子どもは創造的であり、単  
に文化的実践の一つとして世界作りを行うのではなく、われわれの文化でこれまで実現し  
たことのない新たな何かを作り出すのである。世界とは、常に、その場、その時にその会  
話の参加者である子どもによって作り出される創造物であり、文化の伝統を引き継ぎなが  
らも、文化に新しいものを付け加えるところで成り立つのである。

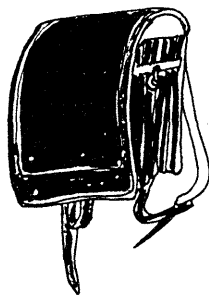
このような、例えば砂場という小さな場を囲んで、幼稚園という場がある。幼稚園のあ  
り方は、当然、個々の小さな場における会話に影響を与える。「入れて」と言われて、入  
れてあげるのは、単に友達だというだけでなく、幼稚園の中で、幼稚園の友達だからであ  
る。入れてあげられない場合に、理由を述べるのも、幼稚園だからである。同時に、幼稚  
園においてこそ、知らない子が始めから「お友達」として語られ、そして毎日友達である  
かのようにつき合うことで、事実友達になっていくのである。

また例えば、積木は、誰の物でもない「みんな」の物であり、先に使用した子が権利を  
持ち、しかし、必要がなければ、他の子に使わせてあげなければならず、いつまでも使っ

ていれば、独り占めはいけなないのだし、交代したりせざるを得ない。

幼稚園には幼稚園独自の文化があるのである。この文化は、幼児の発達を考慮し、教育的な環境を整えるために、そして幼児の集団生活を可能にする配慮を受けて、日本の文化と西洋の文化の背景の元で、長い間の伝統によって作り出されてきたものである。と同時に、とりわけ保育者が日々作っているものでもある。保育者は、子どもと直接会話する中で、また、子ども同士の会話に配慮し、環境を整えることを通じて、この幼稚園の文化を子どもに教えているのである。その教え方の根本は、子どもと共に文化を生きることを通じてであり、その生き方の具体的現れは、個々の場での会話を行い、世界を子どもと共に作り出すことの中にある。多くの場合、保育者は、子どもたちが作り出しつつある世界を尊重し、そこに参入する形で子どもの世界を微妙に作り替えていく。その微妙さに保育の難しさと面白さがあるのであり、保育者の技量の問われるところでもある。この点については、次の機会とし、今回は、子どもの会話の分析から保育の問題へとたどり着いたことで満足したい。

(了)



(お茶の水女子大学)

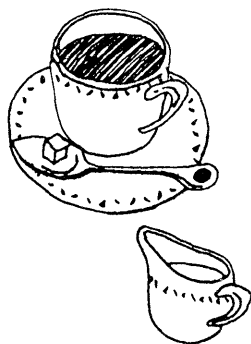
## 「宝の盆」

近藤伊津子・編

あるところに賭ごとの好きな男がいました。毎日、毎日、賭に夢中で、家に帰りもせず、病気のおかみさんも、息子をも顧ることをしませんでした。近所では「賭けぐるい」とその男のことを言いました。

その男は十回賭けると、九回は負けるという調子だったので、家の中にあるものは手当り次第、金に換えてしまいました。家の中はもう何んにもなく、とうとう、米一粒もなくなりました。

おかみさんの阿玉<sup>アヒメ</sup>は仕方なく、掛けていた布団を売



り、米を買うように頼み、

「息子の小宝を見て下さい。かわいそうに、ご飯を食べさせないと、病気になってしまいますよ。賭はしないでください。」と言うと、

「はいはい、もう二度としないよ」と調子よくその男は言うのでした。

けれども、夜になると、布団を売った金を握って出かけてしまいました。阿玉と小宝は、空腹のまますごしました。

夜が明けると阿玉は小宝に、山へ行つて、果実か何か、腹の足しになるものを探してくるよう言いました。

小宝は山に行きました。たわわに実をつけた桃の木をみつけ、すぐに木に登り、桃を五つほど取りました。けれども、とった桃を入れるところがありません。小宝は木から降りて、何か、入れものになるものはないかと、そこらを探してみました。

そうしていると、草むらの中に、何やら黒光りするものがあります。小宝が手に取ってみると、ずっしりと重

いお盆のようなものでした。

さっそくその盆に、取った桃を入れましたが、そのうち二つを食べてしまいました。

桃を食べてしまって小宝が、ひよいと見ると、ちゃんと盆の上には桃が五つあるではありませんか。

「あれ！どうしたのだろう。二つたしかに食べたのに……」

小宝は、また桃を二つ食べました。ところが、やっぱり盆の上には五つの桃があるではありませんか。

「これは宝盆だ！これからは山に桃とりに来なくても、いくらでも、いつでも桃が食べられる。うれしいな！」  
小宝は大よろこびで山を下りました。

途中、つまづいて、お盆を落してしまいました。あわてて、引っくり返ったお盆を持ち上げてみると、五つの桃は地面に落ち、お盆は空っぽでした。

小宝には、この宝盆は、逆さまに引っくり返すと、盆の中のものがそっくり取り出せて、空っぽになることがわかりました。

さて、家に帰った小宝は、母さんの阿玉にこのお盆のことをはなしました。

「これはきつと、昔から話にあった『聚宝盆』に違いない。さあさあ、となりの周おばあさん家に行って銅銭を一枚借りておいで。すぐ、返しますからって」

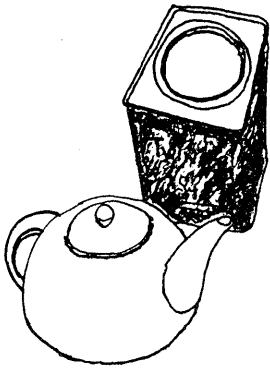
そして、阿玉は、借りて来た銅銭一枚を、お盆にのせ、それから、その銅銭を取り出しました。

「おやお盆の中に、ほんとに、銅銭が一枚……」阿玉は叫びました。

さて、それからというもの、阿玉と小宝はこの『聚宝盆』のおかげで、いいくらしを送りました。

そうしているうちに『賭けぐるい』の男がふらりと家に帰ってきました。

荒家が、すっかり新しい家に変っているのです、門前で、ぼんやりしていると、隣のじいさんが出て来て、「お前さんの家で何が起ったのか……どうして、金持になったのか、まるでわからん。けれども、『賭けぐるい』がもどると、どうなることやら」とためいきをつきまし



た。

「賭けぐるい」の男は、又、賭金が出来たわい、とよろこび勇んで、門をたたきました。家の中に入って、

「阿玉よ、金をどうして手に入れたのかね、天から降ってきたのかね」とたずねましたが阿玉は、だまっていた。

小宝は言わずにおれなくなつて、

「おとつあん、『聚宝盆』だよ。宝盆をひろつたのだよ」といってしまいました。

「賭けぐるい」の男は、狂喜して

「何と何と！『聚宝盆』とは。オレさまは何と運の強い男か。これで金は幾らでもあるということか！」叫びながら、家の中を探しはじめました。

阿玉は『聚宝盆』を取られまいと、『賭けぐるい』の男が探し出した盆を、引っぱり張りました。

二人は争っているうちに倒れて、『賭けぐるい』の男は、こともあろうに『聚宝盆』に尻もちをついてしまったのです。

「賭けぐるい」の男は、どうにかして盆から立ち上る

うとしても、どうしても、うごけません。小宝は「賭けぐるい」の男の手を取って、阿玉は小宝の腰を抱き、うんとこしょと、力一杯ひっぱりました。それで、やっと「賭けぐるい」の男は立ち上ることが出来ました。

ところが、立ち上った「賭けぐるい」の男とは別に、相変らずお盆の上に尻もちをついたままの「賭けぐるい」の男がいるではありませんか。

小宝と阿玉はあわてて、尻もちをついている「賭けぐるい」の男をもう一度引っぱりました。そうすると、やっと「賭けぐるい」の男は立ち上ることが出来ました。

ところが、立ち上った「賭けぐるい」の男とは別に盆の上には尻もちをついたままの「賭けぐるい」の男がやっばり、いるではありませんか。

こんなふうにして引張っているうちに十人の「賭けぐるい」の男をお盆から引張り出してしまいました。

十人の「賭けぐるい」の男と尻もちをついている一人の「賭けぐるい」の男を見て、阿玉は、はっと気をと



もどしました。

そこで急いで、お盆を、尻もちをついている「賭ぐるい」の男ごとひっくり返し、やっと、ほんとの「賭ぐるい」の男を、お盆からひきはなしました。

「賭ぐるい」の男は、お盆から出てくると、「金はどこにかくしているのだ！」と声の限り怒鳴りわめき、十一人の「賭ぐるい」の男たちは、部屋の中、外を走りまわり、箱をあげたり、引出しをあげたり、上に下にと大さわぎしました。そして、家中の金銀宝石をみつげ出し、お盆に入れようとなりました。

それから「賭金が、ぞくぞく出来るぞ！これからは何の心配もなく、心いくまで賭をやるぞ！」と十一人の「賭ぐるい」の男たちは叫びました。

阿玉は、あまりのことに涙が流れるばかりでした。

阿玉は、とつぜん、かなづちをとり、「聚宝盆」を「ごだん」と打ちつけました。「ほーん」と大きな音があたりにとどろき、お盆から出たもの、金、金銀宝石、そして、十人の「賭ぐるい」の男たちは、たちまちのうち

に消えてしまいました。

一人だけになった「賭ぐるい」の男は、割れた「聚宝盆」をぼんやりとながめ、「ああ、何もかもおしまいだ！」とつぶやきました。

(かつこう文庫主宰)

## 住まい「裏から表へ」

小澤誉子

最近、住まいで注目を浴びている空間にキッチンとトイレ・バススペースがあげられる。昔、それらの空間は、北向きであり、住まいとしては、あまりすばらしい位置にはなかった。それらは、どことなくジメジメとし、また、玄関、客間などを表とするなら、それらは、あくまで裏であり、他人の目に触れることをできる限り避ける陰のスペースなのである。その陰のイメージをより強めるかのように、窓は小さく、昼間でも、どことなく闇をイメージさせるような所があった。

子ども達は、夜、それらの陰なるスペースに近づくことに、恐れを抱いた。朝の活気はすでにかたづけの完了した台所にはなく、ただ、明日の朝を待つ、まるで眠るがごとき静けさがそこに漂っていたのである。風呂場もトイレも、子どもにとってひとりでは近づきにくいスペースだった。何か、わけのわからぬ者がそこに存在しているように思え、夜中は、とてもひとりで行けない場所である。

これらのスペースは、人間の生活になくってはならない重要なものであるにもかかわらず、従来、そこは、水場という一種ジメジメした陰質な空間であるイメージが抜けず、住まいにおいて、裏なる位置におかれていた。

ところが、最近、今まで、裏におかれていたこれら空間が、反対に、オープンな空間へと変わりつつある。北側から、それらの空間は、住まいにおけるより表の場所へと移動しつつある。

閉された空間であったキッチンは、家族との共通スペースであるリビングルームにドッキングし、主婦は家族の顔を見ながら仕事ができるようになった。子供は、母親の働く姿を、くつろぎながら見ることができるようになった。キッチンのようにパブリックスペースに、組み込まれることはなくても、より裏の部分から表に移動したのが、バスとトイレである。住まいの全体スペースから見ても、かつてより、バスとトイレのスペースは確実に広くなっていく。ユニットバスというすべてをひとまとめにしたコンパクトな形は、マンションやアパートのきわめて狭い空間しかもたないものに多くを見られる。しかし、一戸建住宅に、ユニットバスを好む傾向は薄れている。つまり、狭いバス・トイレより、より広く快適な空間を人々は求めているといえよう。

今や広々としたバスとやはりゆとりを感じさせるトイレは、人々の憧れとなっている。なぜ、バスやトイレが、これほど注目を浴び始めたのだろうか。それは、ひとつには健康ブームの影響が考えられる。つまり、人の健康とこれらのスペースは、切っても切れない

い関係があるのだ。トイレは、必ず日に何回か使用し、健康をチェックする所である。最近、トイレに、即、尿検査や血圧まで測れるコンピュータを導入したもので出ている。誰もが、ある時間をすくすペースが、より快いものであることを望むのは、ごく自然なことである。また、トイレが明るい表の空間になったことで、子供にとって、こわい場所ではなくなってきた。かつて、小さな豆電球がわずかな明るさを示し、便器の前には、小さな窓があるトイレが多かった。私なども子供の頃、夜、その小さな窓がスーとあいて誰かの手がニューと出て、足をつかまれたらどうしようと、かなりこわい思いをしたものだった。また、トイレにまつわるこわい話も多かったのだ。しかし、今やトイレには、窓がなくなりつつある。そして、明りは、40Wなど、リビングルームと同じように明るくなり、内装の色もカラフルとなって、こわい話など生まれにくくなっている。子供にとって、もはや、トイレは、こわい空間ではなくなっているのだ。

また、バスについて考えてみても、健康のために、バスを有効に使おうという企画がこの雑誌にも特集されるほどだ。そして、最近の温泉ブームで、家庭でも温泉と同じ効果のある沐浴剤が売られ、人気をえている。忙しく働く人々にとって、バスにゆっくりとつかり、一日の疲れをとるのは、必要なことであり、体と心をリラックスさせる空間としてバスの果す役割は、年々注目の度合を高めている。

また、シャワーの普及により、若い人々のバススペースを使う回数が増えている。毎朝、起床の後のシャワーは、多くの人々の実行する所であり、朝のシャンプーも、多くな

っている。夏、汗をかけば、即シャワーを浴びるのが、若い人にとっては、当たり前になりつつあるのだろう。

昔、朝風呂は、ひとつのぜいたくといわれていた。朝風呂は、体をリフレッシュさせる効果があり、頭もスッキリする。しかし、それは、かつてぜいたくなことであった。今や、朝のシャワーは、朝風呂と同じく、リフレッシュさせるために、生活の一部となっている。中学生、高校生でも、朝シャワーを使う人数は、増えている。

使用回数の増加したスペースが、より快適なものであることを望むのは、当然なことだといえよう。バス関係の物を売る店が、経営の成り立つのは、それだけ、人々の関心がバスに対し高いためである。

時代の流れとともに、住まいのあり方も変わってゆく。従来、日本家屋にあった明確な表と裏の概念は、今、変わろうとしている、いいかえれば、裏の部分が、減っているといえる。

裏の概念が稀薄になるにしたがい、人々の住まいへのかかわり方もおのずと異ってくる。住まいにかつて多く存在したコワイお話は、もはや生まれなくなってしまう。子どもと住まいのかかわり合いは、かつてよりドライなものとなり、思い入れもうすくなくなってゆくのである。

また誕生日を迎えました。もう誕生日など喜ぶ歳ではないといわれていますがやはり、いくつになっても私にとって、その日は特別な日であります。前の一年をいかに自分なり満足のゆくように過ごせたかをふり返る日でもあるのです。

一つ一つ歳を重ね、一年一年顔つきが変わってゆくを感じます。もちろん顔つきだけでなく、体の線も、声の出し方も、体力も少しずつ変化しているのですが、前の一年、充実した時をすごした場合、やはり自分では（自己満足なのでしようが……）いい顔をしてきたなと思うのです。

二十代のはつらつとした若さの輝きはすでに薄れてはきたものの、それとは違う何かを身につけてきているのでしょう。また、二十代の時よりも、三十代になった方が、自分の好みもわかってきて、より自分らしさを表現しやすくなったのかも知れません。

多くの人に出会い、多くの物を見てきたことが少しずつ自分というフィルターを通し、必要なものだけを身につけられるようになったのだと思います。

友人の多くは、結婚し、子供を生み、妻や母の顔を持っています。しかし、今だ独身の私には、その顔はなく、二十代からの生活の延長線上の生活をしていきます。それは私が選んできた道であり、その道を歩んでゆくしかないと思えます。

他人の生活、人生は、時として自分のものより輝やきうらやましくさえ思えるものです。結婚をしている友人は、私の自由な生活をうらやましく、私は友人の安定した生活がいいと思うのです。しかし、どの生活もその人が選択してきた結果であり、他の人にはできないものなのです。三十代となり、より自分らしさを表現できる生活をしたいと、誕生日に際し、思うのです。

### 幼児の教育 第八十七巻 第二号

二月号 ©

定価 四〇〇円

昭和六十三年一月二十五日 印刷

昭和六十三年二月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子  
発行人

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

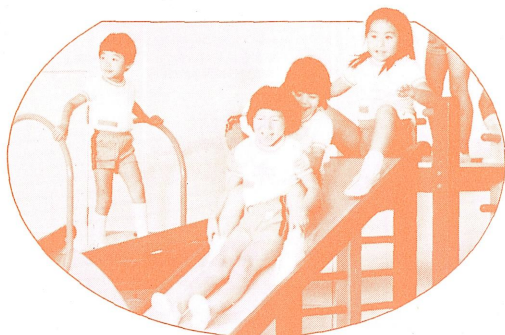
# 卒園記念に最適です。

のびのび自由に、活発に。元気な子どもの室内遊具。

## キンダートリムランド<sup>®</sup>

遊びの工夫がいっぱい。子どもの心とからだを育む  
システム遊具。単体での遊びから、コンビネーションやサーキットレイアウトなど多彩なバリエーションが可能なシステム遊具です。〈実用新案・意匠登録出願中〉

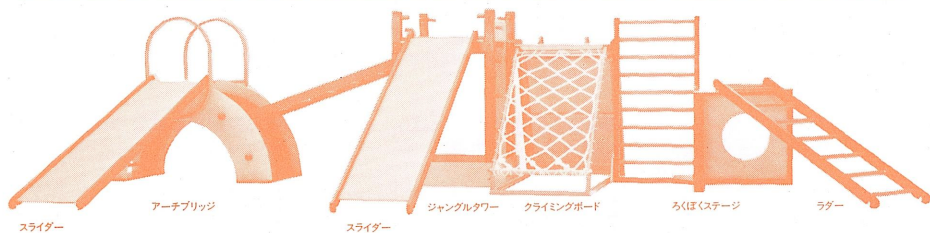
■生産物賠償責任保険付



### ■特長

- それぞれの遊具は単体で遊ぶことももちろん、スライダー（すべり台）やラダー（はしご）を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースやご予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、いきいきと楽しいカラーとデザインです。

### 総合セットコンビネーション例



総合セット 3025-10 ¥750,000

ジャングルタワー、ろくほくステージ、アーチブリッジ、クライミングボード 各1、スライダー、ラダー 各2

ジャングルタワー	ろくほくステージ	アーチブリッジ	クライミングボード	スライダー
3025-01 ¥170,000	3025-02 ¥150,000	3025-03 ¥170,000	3025-04 ¥150,000	3025-05 ¥37,000
●木製 ポリウレタン塗装 ●縦110×横110×高さ145cm	●木製 ポリウレタン塗装 ●縦120×横120×高さ143cm	●木製 ポリウレタン塗装 スチールパイプ 焼付塗装 ●縦90×横180×高さ150cm	●木製 ポリウレタン塗装 スチールパイプ 焼付塗装 縦、ピコロンネット ●縦93×横177×高さ125cm	ラダー 3025-06 ¥23,000

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
キンダーブックの

## フレーベル館



# '88 フレーベル館 月刊絵本ラインアップ

## 保育絵本9誌の新しい企画、夢が大きひろがります。

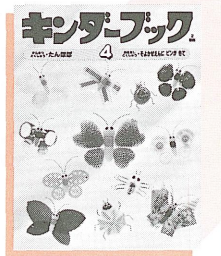
ゆたかな情操と創造する心を大切にする  
**キンダーブック①〈情操〉**



A 4ワイド判/34頁/特別付録「ワイド版カラー工作」「シール」「このほり」/280円

●年中児を対象とした生活絵本。  
 ●季節感、生活感を盛りこんだ「おはなし」「特集」などを、楽しく展開していきます。

観察する目と考える心をそだてる  
**キンダーブック②〈観察〉**



A 4ワイド判/36頁/特別付録「おもしろあいうえおブック」「シール」「このほり」/280円

●年長児を対象とした生活絵本。  
 ●子どもの生活観察する目を進めて必の成長をそだてるお手伝いをします。

はじめての生活絵本  
**キンダーブック ジュニア**

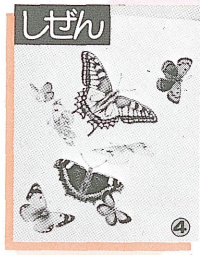


L判/22頁/付録母親向け解説書(こくま通信)/4月号特別付録「シール」「このほり」/250円

●年少児を対象とした総合生活絵本。  
 ●新しい心の芽ばえを育てる豊かな題材をお届けします。

自然の不思議を  
 感動的に伝える

**しぜんーキンダーブック③**



L判/32頁/上製本/特別付録「このほり」/330円

●子どもの興味と関心の芽ばえに、身近な動物を通してやさしく語りかける科学絵本。  
 ●美しいスーパリアリズムの世界！

園生活で  
 はじめて出会う絵本  
**ころころえほん**



A B判/20頁/特別付録「このほり」/250円

●先生やお母さんとともに、あたたかいスキンシップのお手伝いをします。  
 ●リズムカルなおはなしを繰り広げます。

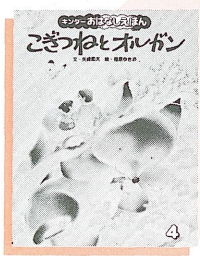
絵本を開く  
 楽しさをあたえる  
**キンダーメルヘン**



L判/26頁/特別付録「このほり」/250円

●子どもたちの豊かな創造力をクンケン伸ばします。

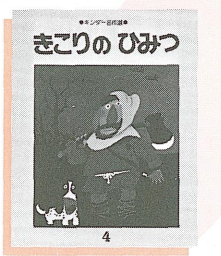
夢と感動する心を そだてる  
**キンダーおはなしえほん**



L判/32頁/上製本/特別付録「このほり」/330円

●子どもたちの夢と感動する心を大切にはぐくむおはなし絵本です。

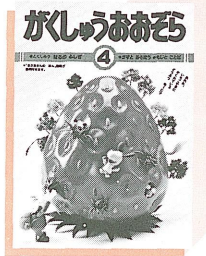
選びぬかれたおはなしえほん  
**キンダー名作選**



L判/32頁/特別付録「このほり」/250円

●キンダーおはなしえほん20年の歴史の中から、語り継がれる好評の絵本の数々をお届けいたします。

幼児の学習意欲を 生みだす  
**がくしゅうおおぞら**



A 4変形判/36頁/別冊付録「おかあさんのほん」/特別付録「あいうえおひょう」/このほり/300円

●5歳児を対象とした総合学習絵本。  
 ●子どもの生活から身近な題材で遊びながら知る・覚える楽しさを学びます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える  
 キンダーブックの

**フレーベル館**